

論 文 題 目

小児思春期下垂体腺腫の臨床的特徴の検討

指導（紹介）教授： 嘉山 孝正

申請者氏名： 石川 雅之

下垂体腺腫は、全脳腫瘍の 16.2%を占め、多くは成人に好発する。一方、小児思春期下垂体腺腫は非常に稀で、その特徴は機能性腺腫の割合が多く、非機能性腺腫は非常に稀と報告されているが、その臨床的特徴についてはいまだに明らかになっていない部分も多い。これまでの報告の多くは欧米からの報告で本邦からの報告はほとんどなく、成人例との比較を行った報告もない。そこで、今回、我々が経験した小児思春期下垂体腺腫における臨床的特徴と従来の報告との相違点、更に同時期に経験した成人症例との相違点を明らかにすることを目的とした。

MRI 導入以後の 13 年間に経験した 18 歳未満の小児思春期症例 10 例と同時期に経験した成人例 126 例を対象とした。評価項目としては臨床症状、特に内分泌学的所見、頭部単純 X 線撮影におけるトルコ鞍所見、術前術後 MRI 検査における腫瘍の大きさおよび進展様式と海綿静脈洞浸潤の有無、腫瘍内出血の有無を比較検討した。

小児思春期例は年齢 9 歳～18 歳で平均 13.7 歳で、男児 5 例、女児 5 例（男女比 1:1）であった。非機能性腺腫が 5 例、機能性腺腫 5 例で、全例が macroadenoma であった。成人例は年齢 19 歳～77 歳で平均 50.0 歳で、男性 52 例、女性 74 例で男女は 1:1.42 であった。非機能性腺腫が 52 例、機能性腺腫 74 例であった。Microadenoma が 28 例、macroadenoma が 98 例であった。内分泌学的腫瘍分類における頻度比較において小児思春期例と成人例に有意差を認めなかった。小児思春期症例では macroadenoma にもかかわらず、トルコ鞍の形状をみると 4 例しか拡大しておらず、成人例と比較して統計学的に有意差を認めた ($p=0.0135$)。非機能性腺腫では 5 例全例でトルコ鞍内では増大せず、鞍上部に著明に進展していた。一方、機能性腺腫では 1 例を除き、トルコ鞍内に留まって成長し鞍上部への進展は軽度であった。海綿静脈洞への浸潤は 10 例中 2 例に認めたが、いずれも機能性腺腫であった。腫瘍内出血に関しては小児・思春期症例は 10 例中 9 例に腫瘍内出血を認め、成人例に比較して有意差を認めた ($p<0.0001$)。

本研究において、我々の経験した小児思春期下垂体腺腫症例の特徴は、(1) 機能性腺腫が少なく、非機能性腺腫の割合が高い。(2) トルコ鞍の拡大を伴わない Macroadenoma が多い。(3) 腫瘍内出血率が極めて高いことである。本研究は、小児思春期下垂体腺腫の診断において、(1) 頭蓋単純 X 線撮影で診断できる例は少ない、(2) 小児思春期の頭痛の原因として下垂体卒中を含める必要があることを明らかにし得た。

平成 18 年 / 月 25 日

山形大学大学院医学系研究科長 殿

学 位 論 文 審 査 結 果 報 告 書

申請者氏名： 赤坂 雅弘

論 文 題 目： 小児思春期下垂体腺腫の臨床的特徴の検討

審 査 委 員：主審査委員

倉智 博久



副審査委員

加藤 丈夫



副審査委員

山川 光徳



審査終了日：平成 18 年 / 月 24 日

【 論 文 審 査 結 果 要 旨 】

本論分は、山形大学医学部神経機能再生外科学教室で、MRI 導入後の 1991 年から 2003 年の 13 年間で経験された小児思春期（18 歳未満）10 例、成人 126 例と多数例の下垂体腺腫の臨床的特徴を比較検討し、日本人の小児思春期下垂体腺腫の特徴を明らかとした研究である。

本論分で明らかとされた点は、

- ①小児思春期下垂体腺腫 10 例中 5 例（50%）が非機能腺腫で、これまでの欧米からの報告の 0-10%と比べ高頻度であった。
- ②小児思春期下垂体腺腫は 10 例すべてが径 1 cm 以上の macroadenoma であったが、腫瘍が大きくても、主に鞍上部に進展し、レ線上トルコ鞍の変化が少なかった。
- ③小児思春期下垂体腺腫で MRI 所見を含め腫瘍内の出血の頻度が高い。ことなどを明らかとしている。

多数例の下垂体腺腫の臨床所見を詳細に検討した臨床研究で、とくに、まれな小児・思春期下垂体腫瘍を 10 例も集め、成人例や欧米の報告と比較検討した点に新知見がある。さらに、これらの特徴が日常診療上、例えば「小児の頭痛」という症状の鑑別診断として下垂体腺腫内の出血（下垂体卒中）ということも意識されるべきである、という概念が出てくるという点が重要で、博士論文として十分な価値があると認められる。

本審査では、発表会にあわせて 10 分間の発表としたが、スライドも完成に近く、発表内容も一部の修正で発表会に出せる状態であった。

したがって、本審査も合格と認める。